造営儀式における諸棟梁の役割と装束について

小普請方大工棟梁の史料紹介を兼ねて

ON ROLES AND ATTIRE OF CARPENTER LEADERS IN BUILDING CEREMONY

Also as the introduction of historical documents on Kobushin-kata carpenter leaders

佐々木 昌孝*, 中川 武**

Masataka SASAKI and Takeshi NAKAGAWA

This paper demonstrates the historical importance of GISHIKI-YAKUWARI and JYOTO-NARABINI-CHONAHAJIME-SHIDAI, both of which are documents in late Edo era and illustrates how a building ceremony was held by top leaders of construction organizations. This sheds light on the nature of the papers by comparing them with the same kind of other documents. This study also investigates the roles and attires of the leaders written in the documents to reveal how the organizations of top carpenters were.

Keywords : *Kobushin-kata Carpenter leader, Building Ceremony, Attire, the KASHIWAGI*

小普請方大工棟梁, 造営儀式, 装束, 柏木伊兵衛

1. はじめに

この度、筆者は、江戸幕府小普請方大工棟梁に関わる二点の史料を確認した。一点は、個人蔵の『上棟 一通』^{注1)}で、その内容は造営の際に執り行われる建築儀式に関するものである。もう一点は、江戸幕府小普請方大工棟梁が執り行った造営儀式の役割分担を記した多聞櫓文書の『御規式役割』で、作成記は無く、どの建物の造営に際して執り行われた記録なのか不明なものの、柏木伊賀（小普請方大工棟梁）、小川忠兵衛ほか延べ60余名の人名が記載されており、江戸時代の造営儀式内容を知る上で有用であることに加え、造営儀式に関わった大工棟梁名が一同に知られる点が極めて重要な史料といえるものである。『上棟 一通』は、小普請方大工棟梁柏木家に伝わったものであるということ以外にその詳しい来歴は不明であるが、『御規式役割』は、江戸城多聞櫓旧蔵という確かな素性の史料といえる。国立公文書館内閣文庫には、紅葉山文庫本を中心に、江戸幕府所蔵の書籍類がおさめられており、その中でも、多聞櫓文書は旧幕府の公文書、記録類のうち、江戸城多聞櫓に収蔵されていたもので、総数万数千点にもおよぶ^{注2) 注3) 注4)}。

以下、本稿では、作事方大棟梁に対して史料数に乏しい小普請方大工棟梁に関する史料の紹介を兼ねて、『上棟 一通』に記されている

建築儀式の装束に関する内容と『御規式役割』から知られる大工棟梁達の装束を比較して検討を加えたいと思う。また、『御規式役割』に記された内容の読解を通して、本史料が作成されたおよその年代を特定し、その上で、小普請方大工棟梁が従えた諸棟梁の存在について論じたいと思う。なお、本稿では、史料名を示す場合ならびに史料の記述を引用する場合には「規式」の字を使い、論を述べる上で一般名称を示す場合には「儀式」の字を使うこととする。

2. 柏木家に伝わった『上棟 一通』について

個人蔵の『上棟 一通』について、まずその書誌を分析する。当史料は、造営の際に執り行われる建築儀式に関するものである。体裁は、表装が紺地金襴雲模様巻子の装で、「上棟 一通」と書かれた外題が貼られている。寸法は縦 24.8×横 861.5 センチ（見返し 25.7 + 本紙 835.8 : 表紙の紙数 9 枚）。木製の外箱に納められており、蓋には「上棟并新初次第 柏木伊兵衛政等秘傳本 貞享五（右横に二と添書）年寫 原本」の墨書きが認められる（図1）。

構成は、収録順に「上棟附新初」、「飾之事」、「上棟役儀之次第」、「行列之次第」、「役人所作之事」、「新初之事」、「上之部（棟之飾・四方堅榎之飾・御内陣玉女之飾・新初之飾・外）」、「中之部（棟之飾・

* ものつくり大学技能工芸学部建設学科 准教授・工修

** 早稲田大学理工学術院建築学科 教授・工博

Assoc. Prof., Building Technologists, Institute of Technologists, M. Eng.
Prof., Faculty of Science and Engineering, Waseda Univ., Dr. Eng.

四方堅槌之飾・御内陣玉女之飾・鉦初之飾・外)」、「下之部(棟之飾・四方堅之槌無之・御内陣玉女之飾・鉦初・外)」、「奥書(跋文1・柏木伊兵衛政等署名 印・跋文2・跋文3)」となっている。

図1 上棟一通(外観と外箱)

本史料の奥書署名に見られる柏木伊兵衛政等は、『(柏木政等伝来目録)』(元禄二年・卷子装・全五巻・竹中大工道具館蔵)(以下、柏木伝来目録)をまとめた江戸幕府小普請方大工棟梁とその名が一致する^{注5)}。『柏木伝来目録』は、奥書より元禄二年(1689)に作成されたと推断される史料で、17世紀後半に台頭し、ついには作事方を凌駕するに至った小普請方大工家に伝来するものとして、建仁寺流や四天王寺流といった他家に多くを依存しない固有の構成内容を伝える書として評価されている^{注6)}。この『柏木伝来目録』にも、五巻すべての奥書に壺印(図2)が押されているが、『上棟一通』と『柏木伝来目録』の印を比較して、それが同一の印であることを今回確認出来た(図3)。また、紺地金欄雲模様を表装についても、両史料で同じものが使用されていることを確認することが出来た(図4)。

図2 柏木伝来目録の壺印(第二巻「神社之部」)

図3 上棟一通(奥書)

図4 柏木伝来目録(表装)

ところで、江戸幕府の造営に従事した大工棟梁家に由来する建築儀式史料には、作事方大棟梁甲良家に伝来する『工匠式』(貞享二年・冊子・全1冊・国立公文書館蔵)、ならびに『建仁寺派家伝書』(宝永末年頃・冊子・全14冊・東京都立中央図書館蔵)のうちの「上棟」と「上棟三段品」の2冊がよく知られており、『匠明』等には見られない建築儀式に関する部門が収録されていることが『建仁寺派家伝書』の史料価値のひとつと評価されている。

一方、この度新たに確認出来た柏木家伝来の『上棟一通』の収録内容は、この『工匠式』と「上棟三段品」を一巻に網羅した内容となっている。『上棟一通』の前半は、構成から各文に至るまでほぼ『工匠式』と同一で、後半は、図3に掲げる御幣の挿絵の有無と奥書以外は、これもまた「上棟三段品」とほぼ同一である。

図5 上棟一通(上之部の挿絵)

甲良家の「上棟」は、貞享二年(1685)の『工匠式』を再編したものと考えられ、また、元禄元年(1688)十月十六日の神社上棟時の記録が収録された「上棟三段品」にも『工匠式』と同時期の底本が存在する可能性が指摘されてきた^{注7)}。この点、『工匠式』と同じ貞享二年の奥書を有し、かつ『工匠式』と「上棟三段品」の内容を一巻に備えた柏木家『上棟一通』の存在は、史料的に非常に重要であると指摘できる。柏木家と甲良家のいずれの儀式史料が底本かという結論は、稿を改めて論じる必要があるが、卷子装という格式、図5に示した挿絵、奥書の押印(『工匠式』には甲良豊前宗賀の署名のみで押印は無)等は、柏木家の『上棟一通』が底本である可能性を示唆するものである。

しかし一方で、『上棟一通』では奥書直前の箇所に紙継が認められる。そもそも『上棟一通』の料紙には、上下に幅およそ10ミリの横罫が引かれているのだが、この横罫が奥書の少し前あたりで途切れる(図6)。「鉦初」と項目名が記された次の行が、ちょうどその

継紙位置にあたる。その上さらに、奥書の跋文にも継紙が認められ、跋文3は筆が異なるようにも見受けられる。

図6 上棟一通（継紙箇所）

【翻刻1：上棟一通奥書】

：括弧書き註記は筆者の加筆。

已上

辰〔元禄元年〕十月十六日

右之三品向後之定目ニ相究候由

此三段之品者上野紅葉山ニ而度々有之候

御上棟之格式ヲ大概右之上之格ニ宛テ中下ハ上ヲ減シ

相定者也

貞享二乙丑季秋日

-----〔紙継〕-----

柏木伊兵衛政等〔壺印〕

秘傳

右之趣貞享五戊辰七月

上ノ方江被入御披見之儀有之候ニ付貞享二之

季秋差出仕差上申候

-----〔紙継〕-----

右之件々一子相傳之難寫紙法口〔懇力〕望之由難趣心

不我雲齊書写之今傳様之平渡不可

古ノ覚者也仍如件

年月日

『上棟一通』の奥書では、上記翻刻のとおり3種の跋文が書き添えられているが、「已上」に続く「辰十月十六日」の跋文は、甲良家の「上棟三段品」にも全く同一の文が認められる（書判は甲良豊前と平内七郎左衛門）ものであるが、「貞享五戊辰七月」以下2種の跋文は「上棟三段品」にはみられないものである。「上ノ方江被入御披見之儀有」とあり、柏木伊兵衛が『上棟一通』を書き記した理由として、「上ノ方」に入るにあたって建築儀式を収録したこのような書を「御披見」し「差出仕差上」る必要があった経緯を記している。

「上ノ方」とは、直前にある跋文の「上野紅葉山ニ而度々有之候」の文言から考えると「上野方」と推測できる。差し出す先が、作事奉行宛であったのか、あるいは小普請奉行宛であったのかは、貞享二年（1685）時点における柏木伊兵衛の立場がどのようなものであったのか不明なため定かでないが、いずれかの奉行宛であったも

のと推察される。

末尾の跋文3は、日付の代わりに「年号月日」という文字でくくられ、本書が一子相伝の他言無用の内容であることを強調している。

以上、『上棟一通』について書誌を分析した結果から、江戸時代の造営儀式を論じるにあたっては、本史料の内容が、甲良家の『工匠式』ならびに「上棟三段品」と同等のものであり、江戸時代初期の史料として甲良家史料と同様に引用できるものと判断できる。

3. 作事方と小普請方の組織について

江戸幕府における造営組織に関しては、未だ不明なことが少なくない。例えば、『上棟一通』の奥書にみられた「上野方」もそうである。また、作事方に関する研究が豊富な一方で、小普請方に関する研究は特に未発展の部分が少なくない。作事方大棟梁ならびに小普請方大工棟梁たちは、それぞれの配下に数十名におよぶ大工棟梁を従えていたが、作事方はその数十名の大工棟梁の名が知られる史料が散見されるのに対し、小普請方にはその類の情報を得られる史料は極めて少ない。そのような状況にあるので、多聞櫓文庫の『御規式役割』が確認できたことは、小普請方の組織を知る上で大きな意味を持つ。

作事方が従えた大工棟梁は、寛永九年（1632）の作事方設置後に整えられた組織で五十人棟梁とも呼ばれた^{注8)}。片岡家文書では、片山三七郎支配棟梁として47～57名が記されている^{注9)}。また、江戸時代に年次公刊された武鑑を引いてみると、安政三年（1856）の出雲寺萬次郎版以降、御作事方大棟梁につづき「同 御大工棟梁」として45名ほどの棟梁名とその居住地が掲載されるようになる。

一方、小普請方は、小普請方大工棟梁が従える諸棟梁が武鑑に掲載されたことは幕末にいたるまで一度もなかった。「文公御筆類」に記された天明八年（1788）八月十九日の「小普請方職人不法行為捨訴」（以下、不法行為捨訴）^{注10)}に、当時の小普請方大工棟梁7名が従えた者のうち不法行為（材木盗売）をはたらいた職人名が出雲方（柏木出雲）、門作方（柏木門作）、小林方、溝口方、大谷方、依田方、村松方といった形で列記される例があるが、残念なことに、この記録にある「職人」は、小普請方の「大工方下拵大工」であり、各々の小普請方大工棟梁が従えた諸棟梁より下の立場にある下拵え請負人たちである。ただし、このような記録であっても、小普請方に関係する諸職人の名がまとまって記される記録は極めて稀である。

【翻刻2：天明八年八月十九日表辻番所前え落置候書付写】

：括弧書き註記は筆者の加筆。

小普請方 〔省略：立石利右衛門 以下21名の名が載る〕

屋根方棟梁 鈴木市兵衛

大工方下拵大工割頭

小林方 〔省略：小平太 以下7名の名が載る〕

溝口方 〔省略：左十 以下4名の名が載る〕

出雲方 〔省略：與兵衛 以下6名の名が載る〕

上ノ〔上野〕方 〔省略：弥兵衛 以下3名の名が載る〕

大谷方 〔省略：賀兵衛 以下5名の名が載る〕

門作方 〔省略：重介 以下4名の名が載る〕

依田方 〔省略：喜三郎 以下2名の名が載る〕

村松方 [省略：久蔵 以下7名の名が載る]
[以下、省略]

この不法行為捨訴からは、作事方の五十人棟梁にあたる小普請方諸棟梁たちのことは分からないのだが、天明期の江戸幕府小普請方請負職人の中に、小林備前家、溝口内匠家、柏木出雲家、大谷長門家、柏木門作家、依田伯耆家、村松阿波家の七家が各々、苗字を持たない諸職人を従えていたことが知られる。また、『上棟一通』の奥書に見られる「上野方」と呼ばれる大工方が、天明八年（1788）時点にも存在していたことが確認できる。

4. 多聞櫓文書の『御規式役割』について

先に紹介した不法行為捨訴が、苗字を持たない諸職人の名を列記した記録であったのに対し、多聞櫓文書の『御規式役割』には、すべて苗字を持つ者たちが記されている。

その内容を見ると「玉女檀」、「洗米」、「土器」、「銚子」、「加[加之・加役のことと思われる]」の文言がみられ、「四方固槌役」、「大工道具出」と「小工道具出」、「大工鉦直」と「小工鉦直」の役が見られるので、ここに記された儀式が「上棟鉦納」であり、その役者について書かれたのがこの『御規式役割』であると推測できる。

本史料は儀式の「次第」ではなく「役割」のため、列記された者たちの席次や行列の次第までは分からないが、それぞれの役割が、冒頭の「御儀式始申上」から「御儀式相於跡申上」にいたるまで、上棟鉦納の儀式の進行に則して並べられている。ゆえに、当時の上棟鉦納における儀式次第をうかがい知ることが出来る。

以下、『御規式役割』の一部写真(図7・8)と全文の翻刻を記す。

図7 御規式役割(冒頭箇所)

図8 御規式役割(末尾箇所)

【翻刻3：御規式役割】

：国立公文書館所蔵（多聞櫓文書）。請求番号（多 028038）。作成記は無し。1通（断簡史料）。写本（原本）^{注11}。縦15×横120セ

ンチ。縦書きを横書きに改め、仮名・漢字とも原文に従い翻刻。括弧書き註記、読点は筆者の加筆。□は不明文字。

御規式役割

- 一、御儀式始申上 大紋 柏木伊賀
- 一、露拂引幕 素袍 小川忠兵衛
- 一、同[露拂引幕] 同[素袍] 多田長兵衛
- 一、金幣持 布衣 大崎直兵衛
- 一、同[金幣持] 同[布衣] 山浦□□郎
- 一、玉女檀守護役 大紋 柏木播磨
- 一、土器直 素袍 高橋万次
- 一、洗米持 同[素袍] 山本庄□郎
- 一、銚子 同[素袍] 石井勘右衛門
- 一、加[加之] 同[素袍] 山野金三郎
- 一、奉幣 大紋 清水肥後
- 一、座具敷 素袍 義崎銀平
- 一、打盤持 [装束の記述無] 横山□松
- 一、御棟棚槌役 布衣 吉永升蔵
- 一、同[御棟棚槌役] 同[布衣] 羽仁□右衛門
- 一、同[御棟棚槌役] 同[布衣] 堤□五郎
- 一、土器直 素袍 水谷市蔵
- 一、洗米持 同[素袍] □崎源七
- 一、銚子 同[素袍] □戸七蔵
- 一、加[加之] 素袍 柘植清八
- 一、土器直 同[素袍] 松田崑兵衛
- 一、洗米持 同[素袍] 谷本□松
- 一、銚子 同[素袍] 太田小兵衛
- 一、加[加之] 同[素袍] □木左次郎
- 一、土器直 同[素袍] 村田清七
- 一、洗米持 同[素袍] 増田善兵衛
- 一、銚子 同[素袍] 井上万蔵
- 一、加[加之] 人同[素袍] □藤□蔵
- 一、崑□掛 同[素袍] 堀 藤兵衛
- 一、同□□ 同[素袍] 大津初右衛門
- 一、四方固槌役 布衣 石井房次郎
- 一、同[四方固槌役] 同[布衣] 山野甚右衛門
- 一、同[四方固槌役] 同[布衣] 中川仁兵衛
- 一、同[四方固槌役] 同[布衣] 日下三右衛門
- 一、洗米持 素袍 尾崎庄八
- 一、同[洗米持] 同[素袍] 石井繁次郎
- 一、銚子 同[素袍] 中川政吉
- 一、加 同[素袍] 小林金太郎
- 一、銚子 同[素袍] 氏井豊蔵
- 一、加 同[素袍] 大澤福三郎
- 一、道具箱持 同[素袍] 吉澤之次郎
- 一、同[道具箱持] 同[素袍] 早川富太郎
- 一、同[道具箱持] 同[素袍] 豊田五助
- 一、同[道具箱持] 同[素袍] 豊田金五郎
- 一、大工道具出 布衣 大島貞助
- 一、小工道具出 同[布衣] 立川栄太郎

一、大工 大紋 村松伊勢
一、小工 同〔大紋〕 柏木若狭
一、大工曲尺直 布衣 金子清次郎
一、小工曲尺直 同〔布衣〕 村越崑平次
一、糸引 素袍 金井信之助
一、大工鉦直 布衣 金子清次郎
一、小工鉦直 同〔布衣〕 村越崑平次
一、鉦 大紋 柏木播磨
一、同〔鉦〕 同〔大紋〕 清水肥後
一、土器直 素袍 日下清蔵
一、土器持 同〔素袍〕 岡野和吉
一、洗米供 大紋 柏木若狭
一、洗米持 素袍 武藤長平
一、土器直 同〔素袍〕 羽仁正之助
一、土器持 同〔素袍〕 飯島兵助
一、神酒供 大紋 柏木播磨
一、銚子 素袍 福田豊次郎
一、加〔加之〕 同〔素袍〕 三浦嘉七
一、御儀式相於跡申上 大紋 柏木伊賀
一、出席 諸棟梁
以上

5. 『御規式役割』の作成年代について

『御規式役割』には、それぞれの役を演ずる者の装束が付記されており、「大紋」の装束をまとう人物は、いずれも國名を受領している者たちである。大紋の他は「布衣」と「素袍」をまとう者がおり、中には複数の役を演じる者もみられる。この受領名を持つ者たちは、その苗字・國名より、小普請方大工棟梁であると推測できる。その受領棟梁たちの役割と装束を抜き出すと次のようになる。

御儀式始申上 大紋 柏木伊賀
玉女檀守護役 大紋 柏木播磨
奉幣 大紋 清水肥後
大工 大紋 村松伊勢
小工 大紋 柏木若狭
鉦 大紋 柏木播磨
同〔鉦〕 同〔大紋〕 清水肥後
洗米供 大紋 柏木若狭
神酒供 大紋 柏木播磨
御儀式相於跡申上 大紋 柏木伊賀

注目されるのは、「清水肥後」と「柏木若狭」の2名である。清水肥後については、大工棟梁が元禄十二年（1699）に建築関係十二職の肝煎に任命された際の記録に清水姓の大工棟梁が含まれていないことから、後発の小普請方大工棟梁家と考えられる^{注12)}。延宝から慶応にいたるまでの武鑑を通観してみると、天保十四年（1843）の『（天保武鑑）』須原屋茂兵衛版が、前年まで7名であった小普請方大工棟梁に、清水某を加えた8名を掲載している^{注13)}。また、天保十四年武鑑をさかのぼる記録に、天保十年（1839）の記事があり^{注14)}、それによると、江戸城西丸御殿普請落成につき小普請方大工

棟梁等に行賞を行った際、柏木大隅の他、村松近江、溝口若狭、大谷出雲、村松伊勢の小普請方大工棟梁5名が「銀式拾枚ずつ」を拝領するのに加えて、同じく小普請方大工棟梁の清水藤右衛門が「銀五枚」を拝領している。柏木若狭は、延宝から慶応にいたるまでの武鑑、ならびに柳営日次記^{注15)}を通観しても、若狭の國名を受領した柏木姓小普請方大工棟梁を見出すことはできないのだが、幕末から明治にかけて活躍した元小普請方大工棟梁・柏木貨一郎^{注16)}が若狭を名乗った人物として知られている。

以上のことを考慮すると、清水肥後と柏木若狭の両名が記された『御規式役割』の作成年代は、肥後の記載より天保期以降と推測でき、さらに、柏木貨一郎が先代の跡職に就き若狭の國名を受領したのが慶応四年（明治元年 1868）であるので、それ以降と推断される。

6. 小普請方大工棟梁と諸棟梁の装束について

『御規式役割』の年代が推測できたところで、『上棟一通』に収録された装束に関する記述と『御規式役割』を比較してみる。

『上棟一通』では、「上棟役儀之次第」の項目で上棟鉦初における役人とそれぞれの装束について、次のように記されている。

【翻刻4：上棟役儀之次第】
：読点は筆者の加筆。

上棟役儀之次第

- 一、棟梁 其日ノ主也、振奉之役ヲ勤
四位五位之束帶、或衣冠大紋、或布衣
- 二、鉦初役 棟梁ニ續タル役也、但鉦初除時ハ無役人
棟之中槌ニ當ル、棟梁之装束ヨリ一階劣ル、若ハ
棟梁幣ヲ勤終テ此儀ヲ勤ル事モ有ヘシ
- 三、棟中槌役 鉦初之役ト装束同前
- 四、玉女役 棟中之槌役ト装束同前
- 五、小工 布衣、或素袍、但棟梁同輩之者此儀ヲ
勤ル時ハ棟梁ト装束同前
- 六、棟槌役 左ヲ上トス、布衣、或素袍
- 七、四方堅槌役 前ヲ上トス、布衣、或素袍
- 八、聲掛役 布衣、或素袍

甲良家の『工匠式』では、この後に「右外之諸役次第不同也、装束各素袍」の一文が書き添えられるが、『上棟一通』にその一文は無い。両史料では、いずれも「大紋」（四位五位の束帯あるいは衣冠大紋あるいは布衣）の装束を身にまとえるのは「棟梁」とされ、「鉦初役」・「棟中槌役」・「玉女役」がそれより一階劣る装束となっている。

次に、慶応四年頃の様子を記した『御規式役割』では、「小工」と「洗米供」の役者である柏木若狭、「神酒供」の柏木播磨がいずれも「大紋」の装束となっている。また、「奉幣」の清水肥後も「大紋」となっているが、この役は『上棟一通』にはみられない。『御規式役割』で主役を演じる柏木伊賀と柏木播磨の両名は、それぞれ「御儀式始申上」と「御儀式相於跡申上」、「玉女檀守護役」が大紋に当たる役なので、二役以上を演じる際にも装束が大紋のままであると推測できる。清水肥後は、「奉幣」役の詳細が不明だが、棟梁として振幣役を担う柏木伊賀に幣を渡す後取の役なのであろうか^{注17)}、棟

梁と同様に大紋となっている。最も疑問なのが柏木若狭で、「小工」と「洗米供」いずれも大紋に値しない役に思えるが、何か格段の事情があったものなのか、あるいは貞享期と慶応期における儀式的あり方に変化があったことが理由なのか、定かではない。

いくつかの疑問点は残されるが、『上棟一通』ならびに『工匠式』の記録からは、多聞櫓文書の『御規式役割』に記された受領名を持たない人物たちは、『工匠式』のいうところの「右外之諸役次第不同也、装束各素袍」と記される役人たちであり、造営に関わる諸大工棟梁たちであると判断してよいであろう。

ところで、『御規式役割』を収蔵している多聞櫓文庫では、江戸城西丸御普請に関する書付類が数点確認できるが、この中の1点に『西丸御普請御上棟御新納之節諸棟梁共之儀申上候書付』（以下、西丸普請上棟新納）がある。

【翻刻5：西丸御普請御上棟御新納之節諸棟梁共之儀申上候書付】
：国立公文書館所蔵（多聞櫓文書）。請求番号（多030257）。元治1年7月。1通（断簡史料）。写本（原本）。縦16.2×横35.3センチ。縦書きを横書きに改め、仮名・漢字とも原文に従い翻刻。読点は筆者の加筆。□は不明文字。

西丸御普請御上棟御新納之節御規式相勤候

諸棟梁先格之通、國名之者大紋、其外

布衣素袍着用仕候間相口候、諸棟梁共も

同様、先格之通り着用為仕候、依之申上候、以上

但、嘉永度西丸御表表向御上棟之節、惣御奉行初メ

掛役人長袴着用、諸棟梁國名之者大紋、

其外布衣素袍着用仕候

子 七月

この『西丸普請上棟新納』は、『御規式役割』とほぼ同時期にあたる元治元年（1864）の記録であり、この記述より「國名之者」が大紋を着用するのは「先格之通」のことで、また、布衣素袍を着用するのがその他の「諸棟梁」であることもまた「先格之通」と認識されていたことが分かる。このような「先格之通」とのいう認識は、慶応四年頃にも当てはめることができると思われる。ゆえに、多聞櫓文書の『御規式役割』は、上棟新納における大工棟梁以下、小普請方配下の諸大工棟梁の役割について書かれたもので、本史料『御規式役割』が小普請方大工棟梁5名を含めた延べ60余名の小普請方大工棟梁配下の組織をうかがい知ることのできる、現時点では数少ない貴重な記録であるといえるのである。

7. まとめ

以上、本稿の検討結果によって、小普請方大工棟梁柏木家に伝わった『上棟一通』の内容が、江戸時代の造営儀式を論じる上で、甲良家の『工匠式』ならびに「上棟三段品」と同等のものであり、甲良家史料と同様に引用できる重要な史料となり得ることを明らかにした。『御規式役割』の作成された時期が、柏木貨一郎が先代の跡職に就いた慶応四年以降であること、小普請方大工棟梁の従えた諸棟梁延べ60余名を知ることのできる重要な記録であることを明らかにした。また、造営儀式における大工棟梁以下諸棟梁の装束のあり

方については、作事方ならびに小普請方の組織が整えられた初期段階の貞享期と幕末の慶応期の造営儀式とで、多くの共通点を維持しながらも、若干の相違が認められる、ないしは許される状況があったことを、あわせて明らかとすることが出来た。

謝辞

『上棟一通』の閲覧に当たっては、昭和女子大学特任教授の平井聖博士にご協力を頂きました。また、『（柏木政等伝来目録）』の図版（図2・4）は公益財団法人竹中大工道具館よりご提供頂きました。

参考文献

- 1) 大貫妙子：江戸城西丸櫓蔵文庫について その整理状況と若干の史料の考察、北の丸、10、1978.3
- 2) 熊井 保：多聞櫓文書について 明治期の目録と由緒書の紹介、北の丸、16、1984.3
- 3) 熊井 保：多聞櫓文書整理の現状 江戸幕府史料目録化の試み、北の丸、17、1985.3
- 4) 佐々木昌孝：江戸幕府小普請方大工棟梁家「柏木家」について、日本建築学会大会学術講演梗概集、F-2、pp.41-42、2005.7
- 5) 河田克博 編著：日本建築古典叢書3 近世建築書 堂宮雛形2 建仁寺流、大龍堂書店、1988
- 6) 日本学士院 編：明治前 日本建築技術史、日本学術振興会、1961
- 7) 西和夫ほか：江戸幕府作事方大工棟梁片岡家文書について（大工文書による近世建築生産史の研究1）、日本建築学会関東支部学術研究発表会梗概集、計画系（41）、pp.333-336、1971.1
- 8) 東京市（現在は東京都）刊：東京市史稿（皇城篇・御墓地篇・変災篇・上水篇・救済篇・港湾篇・遊園篇・宗教篇・橋梁篇・市街篇・産業篇）、1911～
- 9) 石井良助 校訂：徳川禁令考、創文社、1959～1961
- 10) 深井雅海・藤實久美子 共編：江戸幕府役職武鑑編年集成、東洋書林、1996～1998
- 11) 小野清：史料徳川幕府の制度、人物往来社、1968
- 12) 大川三雄：工匠・柏木貨一郎の経歴とその史的評価について、日本建築学会計画系論文集、459、pp.147-156、1994.5
- 13) 伊藤平左エ衛門：建築の儀式、彰国社、1959

注

- 注1) 平井聖氏が所蔵する柏木家伝の卷子装史料3点の内の一つ。本史料では、外箱墨書ならびに本文において「ちょうな」には金偏に斧の字が用いられているが、本稿では鉦と統一して表記している。
- 注2) 参考文献1
- 注3) 参考文献2
- 注4) 参考文献3
- 注5) 参考文献4
- 注6) 参考文献5、p.812
- 注7) 参考文献5、p.747、p.771
- 注8) 参考文献6、pp.90-92、もとは、承応元年（1652）に初めて普請奉行が設けられて作事方・小普請方・普請方棟梁を合わせた定員が五十名となったのを以てその総称を五十人棟梁と称した。貞享二年（1685）小普請奉行組頭設置後も、作事方大棟梁配下の大工棟梁は五十人規模を維持していた。
- 注9) 参考文献7
- 注10) 参考文献8 産業編、32、pp.343-348
- 注11) 国立公文書館では、刊本に対する筆写本を「写本」と分類している。
- 注12) 参考文献9 前集、5、p.217
- 注13) 参考文献10、清水姓の小普請方大工棟梁が武鑑に掲載される初出。掲載内容は「清水□右エ門〔藤力〕五人フチ □□たなべ丁」。天保十四年の『（天保武鑑）』は東京大学総合図書館所蔵のものであるが、内題が欠落しているため括弧書きで『（天保武鑑）』としている。
- 注14) 参考文献11、pp.126-127
- 注15) 本稿では、国立公文書館内閣文庫所蔵の『柳営日記記』と国会図書館所蔵の『年録』を参考とした。
- 注16) 参考文献12
- 注17) 参考文献13、p.94

ON ROLES AND ATTIRES OF CARPENTER LEADERS IN BUILDING CEREMONY

Also as the introduction of historical documents on Kobushin-kata carpenter leaders

Masataka SASAKI and Takeshi NAKAGAWA***

* Assoc. Prof., Building Technologists, Institute of Technologists, M. Eng.

** Prof., Faculty of Science and Engineering, Waseda Univ., Dr. Eng.

This paper clarifies the historical importance of two documents on building ceremony in Edo era: “Joto Ittu” and “Ongishiki Yakuwari”. “Joto Ittu” is a manual of how the ceremony was held, what was needed for it, and what kinds of clothes the participants should wear. “Ongishiki Yakuwari” is, on the other hand, a list of participants and their roles and attires in the ceremony.

The analysis in the paper reveals that the contents described in “Joto Ittu” are almost the same as the ones of both Koshoshiki and Joto Sandanhin of Kora family in terms of building ceremony in Edo era. “Joto Ittu” had been passed down to the carpenters of Kashiwagi family for generations, who had been one of top carpenter leaders as Kobushin-kata. On the other hand, both Koshoshiki and Joto Sandanhin are well-known documents of Kora family, describing the building ceremony in Edo era. Kora family was also one of the top carpenter leaders as Sakuji-kata.

When it comes to the study on Sakuji-kata, there are many documents and materials: a bundle of documents of Kora family and Shomei of Heinouchi family, both of which were the top carpenter leaders of Sakuji-kata. So, the similarity of the document of Kashiwagi family with the one of Kora family means that the Kashiwagi’s documents treated in this paper are important materials in a field of architectural history.

The paper concludes that “Joto Ittu” was written by Ihe Kashiwagi, who was the 1st top carpenter leader of Kashiwagi clan and also wrote “Kashiwagi Masahito Denrai Mokuroku”, in the light of the same seals as signature, called as Tsuboin, shown on both documents. The paper also illustrates that Ihe Kashiwagi wrote “Joto Ittu”, describing the roles of top carpenter leaders as participant and the process in the building ceremony, because he needed to submit the document to officers of Edo Shogunate in order to join in the carpenters’ organization, called as “Ueno-kata”.

This paper also specifies when Ongishiki Yakuwari, a list of participants and their roles and attires in the ceremony, was written. It turned out that the paper, restored in Tamonyagura library in National Archives of Japan, was written after Keio 4(1868), when Kaichiro Kashiwagi, a member of Kashiwagi family, took over the head of the family. This paper unveils that Ongishiki Yakuwari is a record to notify the names of over 60 subordinate carpenter leaders to superior carpenter leaders. Research in this paper indicates that Ongishiki Yakuwari can be recognized as a record on the organizations led by Kobushin-kata carpenter leaders, who were official carpenters and directly served Edo Shogunate.

Comparing the building ceremony in Kyoei period (1684-1687) of early Edo era, which was not so long before Sakuji-kata and Kobushin-kata started to be organized, with the one in Keio period (1865-1868) of late Edo era, in terms of the attires of carpenter leaders, including the top leaders called Daiku torio, it can be also recognized that there are many things in common between them, but some differences.

Another paper would take care of the other properties in the ceremony, such as the settings of altar in the ceremony and the changes of equipment during the ceremony, by analyzing further materials on the building ceremony in Edo era.

(2014年3月9日原稿受理, 2014年6月5日採用決定)